

## 佐用の昆虫館の再出発と内海館長

竹田 真木生

私が神戸大に赴任したのは1984年4月で、暫くしてから、教室の桃井節也教授から、南光町というところに昆虫館があって、その周りにガロアムシという下等な直翅目のような昆虫がいるということを知った。25年前のことである。興味のアンテナは動いたが、すぐに現場に駆けつけなかったせいで、昆虫館を実際に訪れたのはその15年後くらいになる。作東町の“自然と暮らす”社というところが田舎暮らしを誘う新聞広告を挟んでいたのので一遍見るだけでもと、出かけてみた。自然と暮らす社というのは館の手前に自然大学という看板を立てているところで、今は寂れてしまって、売り家の看板がかかっているが、田舎暮らしにあこがれる都会の人々を集めて、ログハウスの作り方などの講習などもやっていた。その会社から、佐用に屋根の抜けた茅葺農家を手に入れた。あまり良く思慮を重ねたわけではないが、それはいつものこと。しかし、裏の畑にウスバシロチョウが訪ねてきたり、車の前をスミナガンが飛んでいくと嬉しくなってしまう。道で轢かれた蛇をつつきにオオムラサキがいたり、クマタカが空を飛んでいる。タガメがたくさん泳いでいる。そこを出撃基地にして、近くのいろいろなところに脚を伸ばし、たまたま瑠璃寺を訪ねた時に、昆虫館に遭遇した。その後、友人を連れて何回か訪問し、館長の内海先生にも会った気がする。個人的には注文したいこともあったが、県立の施設だから、外部の人間には容喙できない。そうして、また10年の年月が過ぎた。

創設期には、公害裁判などがあり、環境問題をクローズアップしていた。西日本で初めての昆虫館で、使命も高らかであった。それから、バブル経済があって、それも弾けて、里山は人が次第に少なくなった。町村合併があり、いろいろな政治的な駆け引きや、しがらみがあって、わだかまりも出来たのだろう。兵庫県の財政も地震以降ぱっとしない。そうこうしているうちに、館の閉鎖が口に上ようになってきた。私自身は、休日の隠れ家として、訪問するだけで、地域に特に親しい友人もなかったから、このような動きとは無関係にすごしていた。ただ、住み始めたきっかけとして、自分で耕し、自分でものを作り、自然を感じ、静かさを楽しむことができたらい、そのためには佐用の自然は自分の懐のように思えたから、ここで、クヌギとエノキの雑木林を育て、子供とむしの不思議の世界を構築できたらよいと思った（“田舎の力”という本を大学の仲間たちと書いたが、そこに、雑木林の子供とむしの王国を作る夢を書いた）。農業を出来るだけ使わない方が良くと教室では語るが、本当にそれで作物が出来るのか、そんなことも実際やってみる前は様子すらも分からなかった。今では茅葺はほとんど残っていないが、このような住居は、生物学的防除の目的にかなっていることも自分で棲んでみて分かった。茅葺は狩蜂の住居を与える。蜘蛛や、アマガエル、コオモリも宿る。

佐用の山河はやさしい。私自身はよそ者であるにもかかわらず、そこはだんだん、故郷のようになってきた。そんな折に、昆虫館閉鎖の知らせが入ってきたが、これは何か自分に属する大事なものを懐からさらっていくようないやな感じがした。やさしい大事なものが奪われていくような気がした。そこで、ヒト博の八木さんに電話をし、どうにかとめられないのかと聞いた。その後の話は、もう皆さんがご存

知なので繰り返さない。八木さんの人脈で、そろそろと素晴らしい仲間達が現れてきて、あれよあれよともりあがって、開館まで後僅かなところまで来た。

35年間の間には紆余曲折があっただろう。超えがたい溝が見えただろう。しかし、こうして、みんなが自分で考えて、心と手を合わせて作り上げていく新しい昆虫館を再出発させることが出来る見通しが立った今、これを守り続けてこられた内海館長の執念とひたむきな思いに感謝しないわけにはいかない。ともかく、奇跡的と思われる狭いマージンを通してこの場所に到達した。これまで館が存続していなかったら全てがなかった。何よりこのことが一番大きい。地域の人たちとも少しづつ話し合いが出来るようになってきた。昆虫館は静かに地面に根を伸ばしているように思われる。

内海功一氏は、いただいた“船越山自然物語”（中央出版エージェンツ刊）によると、1925年のお生まれで、私の母と同じ年、私とは25年違いである。兵庫県立佐用蚕糸学校を卒業後、兵庫青年師範学校へ進まれ、公立青年学校、公立中学校の教諭をされてから、教育委員会指導主事として、千種川グリーンライン昆虫館長を勤められた。私が神戸大にきた年にちょうど、今の私と同じ同じ歳であったことになる。終戦を多感な20歳で迎えられた。舶来の民主主義がやってきて、日本も落ち着き、そうしてやがて開発がすすんで、農村も自然も今度は内からの破壊の波にさらされる。この”自然物語“を読むと、そうして失われるものへの愛惜の念が感じられる。船越山が西日本有数の自然の宝庫（特にシダ類）で、それは代々日本人々と文化がそこに働きかけ育ててきたものである。この自然に対する慈しみの情はこの本の全編を貫いており、著者のやさしさとこだわりが、読むものの胸を打つ。イギリスの貴族の、そして、貴婦人たちの高尚な趣味は、それぞれ昆虫採集と植物画であったと聞いた。この本の挿絵は、氏によって書かれた確かな筆で、美術的にも美しい。瑠璃寺境内と塔中の配置の図もプロのイラストレーターかと疑わせる腕である。

昆虫については釈迦に説法なので割愛するが、植物学的にも船越山のフロラは特筆するものがあるらしい。フナコシイノデ、やポリスティクム・ウツミイの学名のついたハリマイノデなど15種に及ぶイノデをはじめとするシダ類についての解説が与えられている。着床ランや地衣類をふくめた植物の記載は、素晴らしいフィールドガイドである。蛙や陸生貝の記述も散策のよすがとして嬉しい。

昆虫館がこうして、衣替えをし、上から運営されるトップダウンの施設から、下から工夫を集め、地域のそして日本の宝として慈しみをこめて育てていくボトムアップ型のシステムとして生まれ変わっていく時に、こうして、独りで頑固なまでにこだわり、この城を守ってこられた、内海先生の志に、私は深い敬意を感じる。そのこだわりは明瞭であった。昆虫館の展示についても手書きではあれ、教育的な理念は極めて強く感じられるものであった。春の風が木の芽を育て、やがて子供らの声が響いてくるだろう。新しい季節と、昆虫館と里山の自然をまもる動きの新しいページがもうすぐ始まるであろう。今ここに、内海先生が守ってこられたこの志を受け継いで、育てていくことを私たちは誓う。内海先生、本当に有難う。